霊宝館だより

題字・畠野光義師

霊宝館だより　第120号
平成28年10月5日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
公益財団法人高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話0736―56―2029
URL http://www.reihokan.or.jp

真田家菩提寺の蓮華定院の紋白（袈裟）信州真田家の家紋は「六文銭」がよく知られているが、「結び雁金（かりがね）」も用いられた。当院の寺紋は、真田家の家紋と同じとなっている。真田家関連の文化財は、秋期企画展「『真田丸』の時代と高野山」（10月8日(土)～平成29年1月15日(日)）で出陳

利用案内

■開館時間
■5月1日～10月31日　8時30分～17時30分
■11月1日～4月30日　8時30分～17時00分
■休館日　年末年始のみ
■拝観料　大人　600円　高・大学生　350円　小・中学生　250円
高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。
■専用駐車場あり

秋期企画展
「真田丸」の時代と高野山

平成28年10月8日（土）～
平成29年1月15日（日）

第120号　目次

秋期企画展のご案内……2～3
収蔵品の紹介94……4
高野山の古建築 第二十四回……5
高野山の考古学（十二）……6～7
古絵図で巡る高野山探訪（その二）……8～10
高野山霊宝館からのご案内……11
霊宝館の庭園……12

毎月21日（弘法大師の日）ご来館の方にプレゼントあり！　ホームページ割引券もご利用ください

平成28年度秋期企画展

「『真田丸』の時代と高野山」

開催中　平成29年1月15日(日)まで

休館日：平成28年12月28日(水)～平成29年1月4日(水)　※期間中、一部展示替を行います。

前期　平成28年10月8日(土)～11月23日(水)・(祝)

後期　平成28年11月25日(金)～平成28年1月15日(日)

※平成28年度関西文化の日に協賛し、11月14日(月)を無料開館日とします。

真田信綱像〔真田幸村（信繁）像〕

真田信之〔昌幸〕像

真田信之夫人（玉川右京）像

二〇一四年・二〇一五年は大坂の陣より四百年、また二〇一五年は徳川家康没後四百年でもあり、近年の日本刀・城ブームなども相まって、戦国武将への関心は年々高まりをみせています。今年は特にＮＨＫ大河ドラマ「真田丸」人気と共に、真田幸村（信繁）を中心として真田家が注目されています。関ヶ原の戦いで奮闘するも、西軍の敗北により真田昌幸・幸村父子は高野山に流され、のち山麓の九度山にて長い謹慎生活を送りました。本展では真田家ゆかりの品を中心として、高野山に伝わる同時代の武将に関連する文化財を展示公開いたします。

主な展示品

絵画

重文	五大力菩薩像のうち無畏十力吼・雷電吼	普賢院
重文	鶏図屏風　曽我直庵筆	宝亀院
	真田信綱像〔真田幸村（信繁）像〕	蓮華定院
	真田信之〔昌幸〕像	蓮華定院
	真田信之夫人（玉川右京）像	蓮華定院
	真田幸弘像（松代藩第六代藩主）〔真田幸貫か〕	蓮華定院
	真田幸専像（松代藩第七代藩主）	蓮華定院

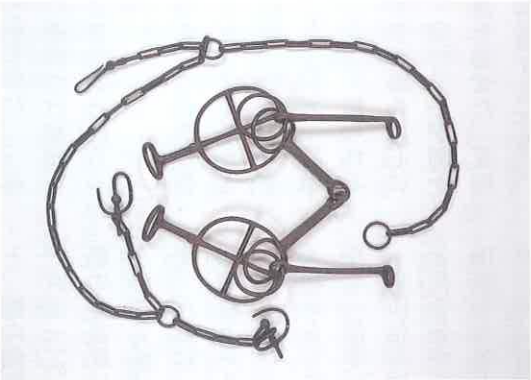
武田二十四将図

真田幸貫像（松代藩第八代藩主）〔真田幸良か〕

真田幸専像（松代藩第七代藩主）

真田幸弘像（松代藩第六代藩主）〔真田幸貫か〕

県指定　真田幸村書状　焼酎の文


轡・附属鏈（真田昌幸所持）

頭形兜（伝真田幸村所持）

真田幸貫像（松代藩第八代藩主）〔真田幸良か〕　蓮華定院
武田勝頼妻子像　※後期　持明院
武田二十四将図　成慶院

書跡

国宝　金銀字一切経　四二九六巻のうち　金剛峯寺
重文　法華一品経（豊臣秀吉奉納）二八巻のうち　金剛峯寺
重文　高麗版一切経（石田三成奉納）六二八五帖のうち　金剛峯寺
県指定　真田幸村書状　焼酎の文　※前期　蓮華定院
天野詣りことわり状　※後期
県指定　文禄三年連歌懐紙　安養院
武田信玄禁制書　持明院

工芸

頭形兜（伝真田幸村所持）　蓮華定院
轡・附属鏈（真田昌幸所持）　蓮華定院
太刀（銘正宗）伝真田幸村所持　蓮華定院
梨地金銀蒔絵采配串（武田信玄所用）　成慶院
短剣（真田伊賀守信利奉納）　金剛峯寺

同時開催　於 本館南廊

特集展示

古写真に見る高野山の今と昔
外国貨幣に見る高野山参拝者の国際性
（世界中からのお賽銭）

みどころパンフレット　販売中

企画展に合わせ、展示品（一部）の解説と高野山・九度山の真田ゆかりの地を紹介する「みどころパンフレット」を制作いたしました。高野山散策のお供にいかがでしょうか？　一冊　一〇〇円　カラー八ページ

収蔵品の紹介 94

真田信之（信幸）像〔真田昌幸像〕
真田信之夫人（玉川右京）像

絹本著色　江戸時代　蓮華定院蔵

信之像　縦50.5㎝　横14.5㎝　夫人像　縦25.2㎝　横12.5㎝

賛「みた頼む　こゝろはにしに　ありあけの　南無阿弥陀仏　月にね覚の　あけほのゝ空　清花院正岳妙貞」

カッコがいくつもある名称に、一体誰？と思うでしょうが、それだけ複雑な背景のある絵だということを始めに言っておきます。

戦国時代に詳しい人なら、この男性像を見て「真田昌幸！」とピンとくるかと思います。真田幸村（信繁、一五六七または一五七〇～一六一五）の父、昌幸（一五四七～一六一一）として知られる肖像画で、多くの写しが長野県を中心に伝わっています。昌幸・幸村父子が関ヶ原の戦いののち一時期身を寄せた、真田家菩提寺の蓮華定院が所蔵する本像は、これら「真田昌幸像」の祖本（オリジナル）と見なされています。ところが今回紹介する二幅が一緒に納められている箱には「大鋒院殿」「清花院殿」、つまり幸村の兄である信之（一五六六～一六五八）と、彼の側室の玉川右京（一六〇〇？～一六七一）の像であると書かれています。箱の蓋裏銘によると、これらは玉川正武という人物によって奉納されたようです。正武は「紀州臣」とあるので紀州藩の家臣とみられますが詳細は不明で、また玉川という姓から右京にゆかりのある人物かもしれません。また「信之」ではなく「信幸」と記されています。

真田信幸は関ヶ原の戦いの際、父・弟と袂を分かち、東軍側についたことで真田家を大名として存続させました。関ヶ原以後は西軍として徳川を苦しめた父と同じ「幸」を用いず「信之」と改名しました。なので描かれている老齢の彼は「信之」のはずですが、箱の銘も、蓮華定院の裏山にある供養塔に刻まれた名前も「信幸」となっています。大坂の陣以降、真田家は上田（長野県上田市）から松代（長野県長野市）へ加増移封されましたが、信之は真田の旧領である上田を離れるのが不服だったようで、そういった徳川への反骨の気持ちや父への思いが「幸」の字にあらわれているのかもしれません。

話は戻りますが、なぜ信之像が昌幸像として広まったのか、については諸説あります。元々昌幸像として描かれたが、徳川の世では名前を出せず信之として納めた、もしくは九三歳という長寿を保った信之の像を、写しでは若く描いて昌幸（六五歳で没）とした、などと言われますが、実際のところはよく分かりません。信之像の上に書かれた賛「謀廻帷幄中勝事決千里外」は『漢書』の一部で「陣営の中で計略を練り、はるか遠くの地で勝利を得る」、といった意味で信之自筆とされます。この言葉は信之よりも智謀家で知られる昌幸にふさわしい気もしますし、九度山での長い謹慎生活を経て、大坂の陣で華々しい活躍をした幸村をも彷彿とさせます。蓮華定院に真田信綱（昌幸の兄）として伝わる画像が、写しでは幸村として知られているのと同様、謎が残る絵です。昌幸・幸村が徳川を苦しめたヒーローとして人気が高まるにつれ、彼らの肖像を求める人が増えた、ということを物語っているように思います。

なお玉川右京像についてですが、天保一四年（一八四三）に完成した河原綱徳編『真田家御事蹟稿』に詳しく書かれています。信之が亡くなった後は京都で剃髪して妙貞と名乗り、彼女の絵の賛は自ら詠み、また自らの髪を用いて縫ったものである、と同資料や箱書に記されています。確かによく見ると文字は刺繍であらわされています。信之と共に、高野山で弔われたいという思いを感じる遺品です。

（福形安希子）

真田信之・夫人像箱書（実際は縦書き）

（蓋表）
大鋒院殿
清花院殿　画像

（蓋裏）
大鋒院殿従五位下伊豆守真田滋野信幸朝臣像
讃自筆
清花院殿平井源亀子像　玉川伊豫守源正行女
讃自詠自筆以剃髪手自縫
紀州臣
後代為慕両君者納之　玉川伊右衛門尉源正武

連載

高野山の古建築

第二十四回　宝寿院

宝寿院客殿と台所の全景　正門を入ると右手に客殿と台所が建つ。写真の右が台所、左が客殿でその間に玄関が建つ。江戸時代末に再建された。

宝寿院の正門　高い石垣と塀に囲まれた奥に正門が建ち、城郭を思わせるような近寄りがたい威厳と風格が感じられる。

客殿上段の間　大広間から矩折れに、上段の間25畳と上段7.5畳が並び、さらに上段の左手に上々段3畳が連なる。床の高さと天井の意匠が格式を表す。

客殿大広間　客殿の主室の大広間は42畳敷き。その奥に15畳と9畳の2室が連なる。紺碧障屏画や高い天井は格式の高さを表している。

鳴海　祥博

宝寿院は壇上伽藍の北側の道路を西に向かった突き当たりにあります。高い石垣と塀に囲まれ、奥まった門までの参道は綺麗に掃き清められ、両側には筋目を付けた砂利が敷き詰められて近寄りがたい雰囲気に満ちています。おそるおそる門に近づいてみると、「大本山宝寿院」という額とともに「高野山専修学院」とあります。そして「修行中に就き入山をご遠慮下さい」という掛け札がありました。

ここは高野山真言宗のお坊さんが一年間籠りきりで修行する特別なお寺なのです。一般の人々は容易に境内の様子を目にすることはできないのですが、今回は特別に許可を頂いて宝寿院を紹介します。

宝寿院は明治までは無量寿院という名のお寺でした。大正二年に宝性院というお寺と併合し、二つの寺院の名を取って宝寿院と称することになったのです。この無量寿院と宝性院は、室町時代前期の十四世紀末に二人の高僧がそれぞれの寺院の住職となり、その教えが寿門、宝門という二大学派を確立し、それ以後この両寺院の住職は「門主」と称され、高野山の密教教学を主導する特別な存在となりました。江戸時代には両門主は高野山を代表して一年交替で江戸に滞在し、将軍に謁見しました。これは参勤交代に相当するもので、高野山が諸国の大名と同列に扱われ、その代表が「門主」だったわけです。参勤交代を行った寺院は高野山の他にはなく、いかに高野山が特別な存在であったか、また「門主」がいかに重要な職責を担っていたかが知られます。

奥之院の参道に全国の諸大名の墓石が無数に並ぶ背景には、このような江戸幕府と高野山の係わりがあったのです。

現在の総本山金剛峯寺のある一郭は、江戸時代には青厳寺と称され、高野山全山を代表する住職である寺務検校の住まう寺、無量寿院と宝性院は高野山真言宗の教義を担う寺で、この三箇寺が高野山教団の中心だったわけです。その無量寿院を引き継いだ現在の宝寿院の客殿や台所の建築群は、江戸時代末期の天保十年（一八三九）の火災の後に再建されたものと伝えられていますが、総本山金剛峯寺の大主殿に劣らぬ壮大な規模と格式、威厳を持っています。規模だけではなく客殿や台所の部屋の配置や意匠などもほとんど同じです。客殿と台所の取り合い部分には玄関が建てられ、玄関の奥に「中門」と呼ばれる広い板敷きの間があることも全く同じ構成となっています。この建築的な類似性は他の山内寺院にも見られることで、高野山の寺院建築の大きな特色となっています。ただ、宝寿院の上々段の間の長押金具が葵の紋であるのは、将軍と門主の特別な関係を暗示しているようです。

無量寿院と宝性院の合併は一大改革であったと思いますが、そこでは現在も専門道場として高野山密教教学の修行と研鑽が日々絶えることなく続いているのです。

高野山の考古学（十二）

小仏塔の世界②

公益財団法人 元興寺文化財研究所
狭川 真一

高野山様式の五輪塔

今回は、高野山独特とされる五輪塔を紹介します。通常の五輪塔は、火輪と呼ぶ屋根の上端を平坦に作り、その平面中央にホゾ穴を彫り、上に乗る半球形の風輪の底も平らにして中心にホゾを作り出します。それを差し込んで安定されるのが一般的な五輪塔の姿ですから、火輪の上面は平坦な一直線になります（図1）。ところが、高野山様式の五輪塔では、火輪の上部に風輪の底部を突き刺したような形に作りますので、火輪の上辺が湾曲した線を描きます（図2）。これを採用した五輪塔を考古学では噛合式（かみあわせしき）五輪塔（図3）と呼んでいますが、ほぼ高野山でしか確認できないことから、奥之院の五輪塔を整理された藤澤一夫先生は、高野山様式の五輪塔として、高野山を代表する五輪塔の形式であることを示されました。

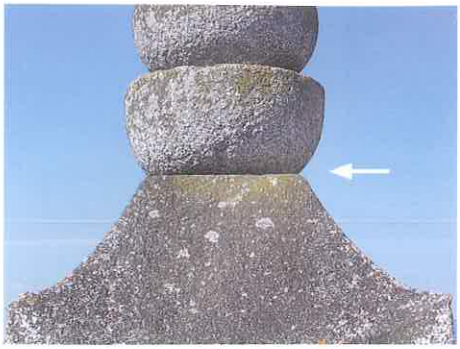


図1　通常の五輪塔の火輪上面と風輪底面
（大阪府寛弘寺神山墓地五輪塔）

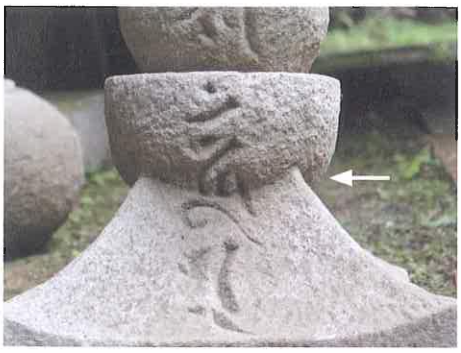


図2　噛合式五輪塔の火輪上面と風輪底面
（高野山霊宝館蔵）

この噛合式五輪塔は、火輪上端の彫刻が複雑になるため、風輪と火輪は一石で作り上げます。そして風輪は、最頂部の空輪と一石で作られるのが通常ですので、噛合式五輪塔の場合は火輪以上を一石で作るのが大半です。したがって、大きな石材（原石）を使用しなければなりませんし、技術的にもかなり高度な技（わざ）が必要になります。そのため、花崗岩よりも柔らかい砂岩で製作されるものがほとんどです。

図3　高野山奥之院噛合式五輪塔全景
（高野山霊宝館蔵）

噛合式五輪塔の年代

高野山において噛合式五輪塔が確認されるのは、奥之院と西南院、そ

して町石です。町石以外はすべて砂岩製で、地輪から空輪まで揃って残っているものは、水輪に大きな納骨穴を彫り込んでいます。こうした資料は、弘安七年（一二八四）から貞和三年（一三四七）の間に集中して見られます（シリーズ六回目に詳しく解説しました）ので、噛合式五輪塔も十三世紀後期から十四世紀中期に集中して製作された塔であると推察できましょう。

高野山で最も古い五輪塔の一群は、京都から運ばれてきた花崗岩製ものだろうと考えましたが、噛合式五輪塔はおそらく高野山で作られた最初の石塔の一群だと思われます。

高野山様式五輪塔の系譜をたずねて

ではこの形式の塔は高野山にしか存在しないのでしょうか。実は、最古の銘文のある西南院の弘安八年塔よりかなり以前の資料に見いだされるのです。著名なものは、鎌倉時代初期に奈良の東大寺を復興した重源上人が考案したとされる五輪塔です。代表的な例は、近江の敏満寺に建久九年（一一九八）に奉納されたもので、現在は滋賀県多賀町の胡宮神社に伝来しています（図4）。もう一つ、兵庫県播磨の浄土寺にもあります。いずれも金銅製ですが、見事な噛合式五輪塔です。両塔とも火輪の平面形が三角形に作られるという珍しい塔で、それは五輪塔の本来の意味を忠実に再現した結果と考えられています。そうすると、火輪上部が噛合式になることも、この再現に該当するだろうと思われます。平安時代後期に遡る、臼杵の嘉応銘五輪塔や鳥取県ヒイデの五輪塔（図5）も噛合式に含まれますので、古い系譜を引く形であることが分かります。

図5　鳥取県倉吉市ヒイデの五輪塔
（平安時代後期）

図4　敏満寺奉納の三角五輪塔
（模造品・多賀町教育委員会蔵）

では、噛合式を採用した高野山の石工は、どこでその形式を学んだのでしょうか。これは資料が現存していないのでかなり難しい問題ですが、重源の作善業実績目録とも言える『南無阿弥陀仏作善集』には、高野山新別所の三重塔内に、高さ二・四メートルもある銅製の五輪塔が奉納されていると書かれています。重源が奉納した五輪塔ですから、形は三角五輪塔だったでしょう。重源の奉納から噛合式五輪塔の登場まで、八十年余りが経過していますが、消滅していない限り、巨大な塔はシンボリックな存在として信仰されていたことが想定され、十分にモデルになり得たと考えられます。

この推測が正しければ、高野山で噛合式五輪塔を製作した石工集団の先祖は、重源と深く関係した石工へと辿れるのかも知れません。

噛合式五輪塔の終焉

奥之院、西南院などの山内に見られるほか近在では、丹生都比売神社に正安四年（一三〇二）と延元元年（一三三六）の二例が確認できる程度です。それ以後は奈良県生駒市に二例と、那智山青岸渡寺に類似の塔がある程度です。高野山以外では目立って採用されることもなく、衰退してしまいます。

それは、五輪塔自体が人気のある石塔で、室町時代に入ると量産化が進みます。噛合式五輪塔は、彫成が複雑で技術力と時間がかかり、しかも原石に大きなものを用意する必要があるなど、生産効率の悪さから人気を得られなかったのかも知れません。

【参考文献】
藤澤一夫　一九七〇「高野山奥之院の石造塔婆」『高野山奥之院の地寶』和歌山県教育委員会、高野山文化財保存会
狭川真一　二〇〇五「噛合式五輪塔考」『日引』第六号、石造物研究会

「古絵図で巡る高野山探訪」（その二）

金剛峯寺―興山寺東照宮

『興山寺総絵図』（一幅　江戸時代）金剛峯寺（図1）に記される興山寺の北側には東照宮（図2）が描かれています。また、当時の東照宮の様子は『興山寺権現図』（明治十七年（一八八四）報恩院（図3）からも、具体的に窺うことができます。前号（『霊宝館だより』一一九号）では、行人方の本山である興山寺は、高野山大学の前身である古儀大学林などの旧制大学がおかれ、またその東照宮は明治五年（一八九二）に建物が移転、あるいは取り壊されて、その後運動場となったとお伝えしました（図4）。

現在、高野山の各所には、当時の興山寺の東照宮の建造物が残され、宗教施設などとして活用されています。

明治二十一年（一八八八）、大火

図1　『興山寺総絵図』江戸時代　金剛峯寺（手前：興山寺、奥：東照宮）

図2　同上 東照宮部分

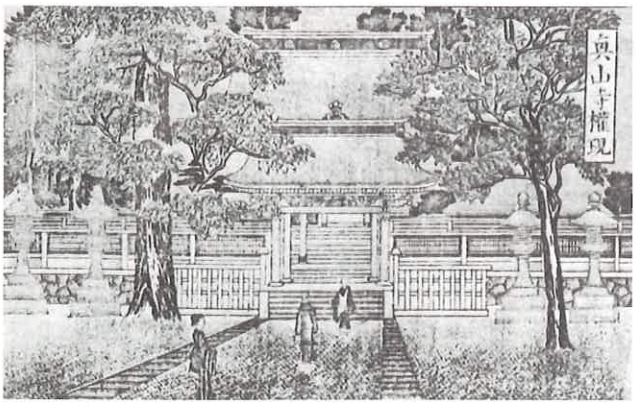


図3　『興山寺権現図』明治17年（1884）　報恩院

図4　現在の興山寺東照宮跡

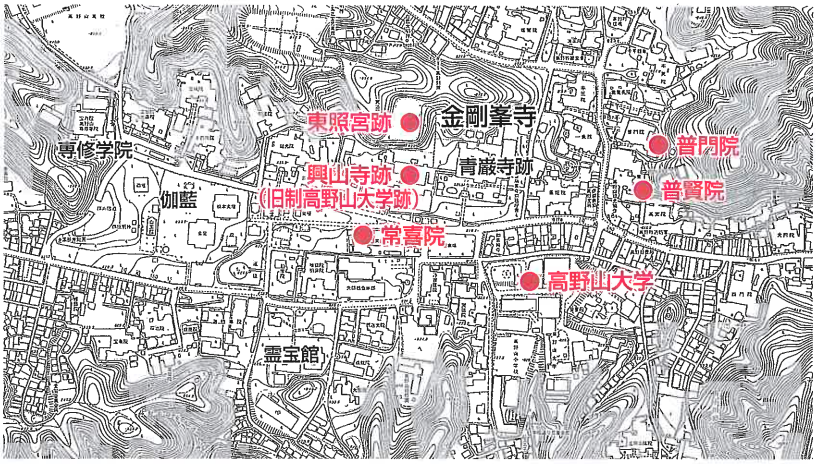


図5　興山寺東照宮の建造物・遺構所在地

図6　普門院本堂 外観（興山寺東照宮本殿〈廟堂〉）

により、高野山の広範囲が甚大な被害を受け、多くの子院（塔頭）の建造物が焼失し、その中には、普門院、普賢院、常喜院が含まれていました（図5）。特に、普門院、普賢院はこの火災により本堂や庫裏を失っていましたので、本堂の再建は早急に行う必要がありました。時を同じくして、興山寺の東照宮の取り壊しの話が持ち上がり、金剛峯寺と各子院との間で話し合いが持たれ、東照宮の建造物が山内の各所に移転されたようです。

普門院の本堂（図6）は、東照宮の「本殿（廟堂）」が移築されたものと伝えられています（図2）。寛永五年（一六二八）に東照宮で建立され、その後、明治二十五年（一八九二）に普門院境内に移築されたとのことです。

建物の外観は、本堂として相応しいように少し改変が行われていますが、内部は当初の本殿の状況を良好に留め、煌びやかな彩色が施されています（図7）。

図7　普門院本堂 内観（興山寺東照宮本殿〈廟堂〉）

図8　普賢院本堂 外観（興山寺東照宮拝殿）

普賢院の本堂（図8）は、東照宮の「拝殿」が移築されたものと伝えられています（図2）。同じく寛永五年に東照宮で建立され、その後、明治二十五年に普賢院境内に移築され、増改築されたとのことです。

普門院同様、建物の外観は本堂として相応しいように少し改変が行われていますが、内部は当初の拝殿の彩色が各所に残されています。

同院の裏門（重要文化財　普賢院四脚門（図9））である東照宮の「表門」（図2）は、寛永年間（一六二四～一六四三）に東照宮で建立され、簡素な構造で小規模な建造物ですが、本殿、拝殿同様、彩色が施され、当時の東照宮の建造物の中で最も保存状態が良好です（図10）。

図9　普賢院裏門の重文 普賢院四脚門（興山寺東照宮表門）

図10　普賢院裏門 組物の彩色

常喜院校倉（和歌山県指定文化財（図11））は、東照宮の「経蔵」が移築されたものと伝えられています（図2）。寛永八年（一六三一）に東照宮で建立され、当初「国宝 金銀字一切経」（平安時代　金剛峯寺）の約四千余巻が納められていたと伝えられています。その後、明治二十五年に常喜院境内に位牌堂として移築されましたが、江戸時代に建立された校倉建築として大変貴重な建造物です。

また、現在の高野山大学構内にも東照宮の建造物の遺構が残されています（図5）。松下講堂黎明館の正面にある階段の両脇石柱上には、石のモニュメントがあります（図12）。

図11　和歌山県指定 常喜院校倉（興山寺東照宮経蔵）

この石は東照宮の登り口の門（図2）の礎石で、明治四十四年（一九一一）に興山寺跡に建てられた旧制高野山大学の正門として移築されました（図13）。この門は黒く、当時、東京帝国大学（現在の東京大学）の赤門をもじって、「東の赤門、西の黒門」と呼ばれていました。

その後、昭和四年（一九二九）に現在の高野山大学の場所に移築されましたが、同二十五年（一九五〇）のジェーン台風で倒壊し、現在は礎石のみが残されています。

その他、東照宮に関するものは、建造物以外にも伝えられています。

本殿前に取り付けられていたと考えられる本坪鈴（江戸時代　桜池院）です（図14）。この鈴には「元禄元年（一六八八）五月吉日」と線刻されていますが、実際に使用された痕跡がありません。推測ですが、従来使用していた鈴を新調しましたが、何らかの理由により設置できず、伝世したことが考えられます。

図12　高野山大学旧正門（黒門）の礎石

当時、東照宮の建造物を取り壊し移築することは、現代と違い、近代的な建設機械に頼らず、人力による大変手間のかかる大事業でした。新たに樹木を伐採して新造の建造物を建てるのは、費用面で高く、また「もったいない」ので、中古の建造物を移築した方が、安価で済むという理由だけで、リサイクル・リフォームされたのではないように思われます。

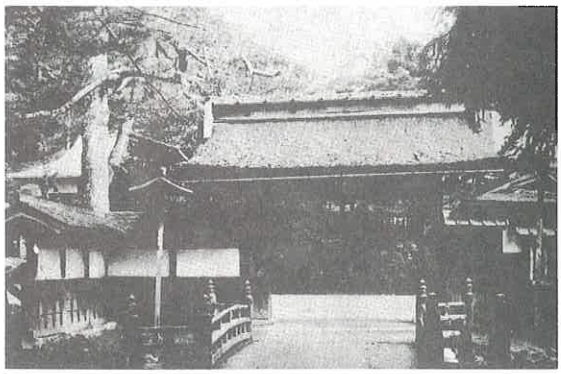


図13　黒門（旧制大学期に撮影）

むしろ、そこには物を大切にする精神、まだ使える建造物の寿命を全うするといった精神が働いていたとも考えられます。

このような「もったいない」の精神は、決して恥ずかしいことではありません。本来、自然環境に配慮した、慎ましい日本の伝統的な考え方です。これらの山内各所に点在する東照宮の建造物を巡ることで、文化財の鑑賞を楽しみ、当時を偲ぶことができますが、同時に、古き良き日本の物を大切にする精神を学ぶこともできます。

（鳥羽正剛）

※普門院本堂、普賢院本堂、常喜院校倉は一般公開しておりませんので、ご注意ください。

図14　本坪鈴　江戸時代　桜池院

高野山霊宝館からのご案内

イベント報告

◎ミュージアム法話

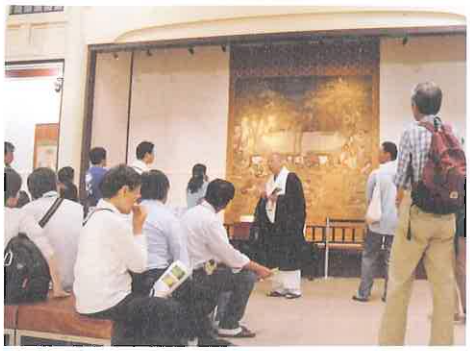
・7月10日(日)
橋本真人師（高野山真言宗教学部次長）

・7月24日(日)
長谷川惇也師（兵庫・長谷寺）

・8月20日(土)
富田向真師（高野山高等学校教諭）

・8月27日(土)
井上裕径師（高野山・蓮華定院徒弟）

・9月17日(土)
長谷川惇也師（兵庫・長谷寺）


ミュージアム法話の風景

文化財として展示している彫刻や絵画の仏像を、お坊さんの法話を通じて、解説しました。普段よく霊宝館に来館される方も、違った角度から仏像を見ることができたとの反響もあり、大変好評でした。

◎文化財ふれあい体験事業

埋蔵文化財の講演会「高野山の遺跡」・出土遺物「洗浄作業」体験

この度、霊宝館友の会会員、また高野町民の皆様を対象として、平成28年8月19日(土)、また高野山高等学校の校外特別事業として、8月1日(月)、24日(水)に、当館学芸員による「高野山の遺跡」などと題した講演会と、高野山・金剛峯寺遺跡から出土した土器を中心とする遺物の「洗浄作業」体験を実施しました。参加者は、普段は博物館のガラスケースの中でしか見られない鎌倉時代から江戸時代にかけての遺物を自ら手にし、目を輝かせて作業に取り組んでいた様子でした。

講演会の様子

洗浄作業体験の様子

これからの催し・展覧会

◎ミュージアム法話

《日時》
・10月29日(土)　午後1時
吉井榮勇師（兵庫・榮潤寺）

・11月23日(水)・(祝)　午前11時
今村祐恵師（京都・縁城寺）

《場所》高野山霊宝館

ご参加される方は、拝観受付前にお集まりください。

《参加費》無料。但し、拝観料（一般600円）が必要。事前申込は不要。

《お問い合わせ先》
高野山霊宝館　ミュージアム法話係
（電話0736―56―2029）

◎高野山霊宝館友の会文化講座

「知られざる高野山!!
～一心院谷を歩く～」

高野山霊宝館友の会では、会員の皆様を対象に、高野山の歴史的変遷を歩いて学ぶ文化講座を開催いたします。今回は、源頼朝と関係が深く、現在も史跡が数多く残る「一心院谷」を特別解説付きで巡ります。秋の企画展にちなみ、真田家墓所も見学いたしますので、奮ってご参加くださいますようご案内申し上げます。

真田家墓所（蓮華定院）

開催日：平成28年11月20日(日)
午後1時～3時

講師：
高野山霊宝館 副館長　山陰加春夫
高野山大学図書館 課長　木下浩良

定員：40人（先着）

受付期間：
友の会先行受付　10月3日(月)～14日(金)
※定員に満たない場合に限り、一般公募します。
一般受付　10月17日(月)～31日(月)
※定員に達し次第、受付終了

受講料：無料

詳しくは高野山霊宝館ホームページをご確認ください。

〈問い合わせ先・申込先〉
高野山霊宝館　友の会係
0736―56―2029

お問い合せ先　高野山霊宝館　TEL 0736―56―2029(代)

霊宝館の庭園

アケビ・開け実・阿介比・木通

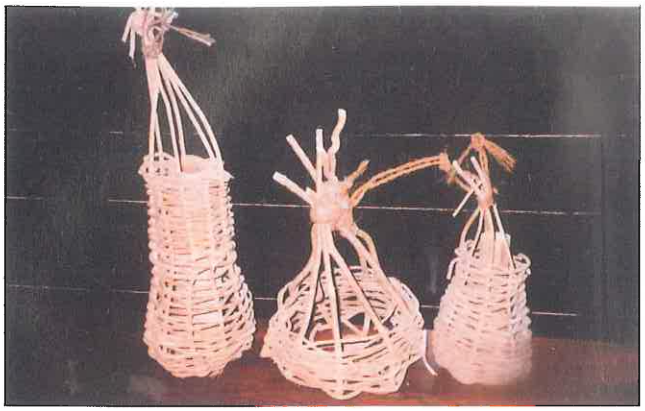
元高野山高等学校長　亀岡　弘昭

アケビはアケビ科・アケビ属の落葉蔓性低木です。

高野山に、現在、自生するアケビ属の種はアケビ、ミツバアケビ、ゴヨウアケビの三種であると、最新（二〇一三年改訂）の「高野山植物目録」山本修平・中野玖美共著（中野さんは旧姓が内川、高野山ご出身）にも記載されています。

ミツバアケビ

これらの三種の外見上の特徴の一つは複葉の小葉がアケビは五枚、ミツバアケビは三枚、ゴヨウアケビは多くは五枚で三枚のもの四枚のものもあります。ゴヨウアケビはアケビとミツバアケビの雑種と推定されるというのが通説になっています。なお、アケビには「五枚の小葉をもつアケビ」、ミツバアケビには「三枚の小葉をもつアケビ」という意味の学名（世界共通名）がつけられています。アケビとの関係、この種の実態などからゴヨウアケビ（五葉あけび）という和名は妥当かな、という思いがあります。



蔓を用いた試作品

アケビ属のアケビという和名の由来は、これらの果実が熟すと革質の外皮が縦に裂けて開くことによる「開け実」の転訛といい、同じ理由による、あきび（開き実）、わけび（分け実）という方言名も。熟すと外皮の表面が紅紫色を帯びるものがあるので「朱実」によるという異説もあります。

字は阿介比、木通、通草、野木瓜山姫などが当てられています。

高野山で生まれ育った方々、故郷を異にする人達、それぞれに、子供の頃の秋の山野での甘い果実採りなど懐かしい憶いのある植物の一つでは、と思います。

この木本の蔓（あけびかずら）はしなやかで強靱なため地方によっては、大小の籠などの実用品や土産品用としての編物細工の材料に用いられています。

高野山の植物の調査研究の先駆者であり、著書や「高野山時報」の紙面などで、高野山の植物や森林の保護と有効利用について多くの提言をされている小川由一氏（一八八九―一九七〇）は、著書の中で、次のように書き遺されています。

「東北地方や長野県の名産アケビ細工はアケビの一種、ミツバアケビの蔓で編んだものである。高野山にはミツバアケビは勿論…編物細工の材料となるものが多い。一つ高野土産として気の利いた新意匠の編物細工でも、工夫したらおもしろくはないだろうか」と。

今年も、高野山の山野に三種のアケビの「実を開ける」時季が近づいてきました。